

## 環境アセスメント学会 生態系研究部会 第20回定例会 報告

- テーマ：人間社会のベクトルと日本の環境アセスメントの構造と機能の検証
- 話題提供者：千葉県環境生活部副技監・千葉県立中央博物館副館長 中村俊彦氏
- コーディネータ：東京都市大学 環境情報学部教授 田中章氏
- 日時：平成23年11月10日（木）18:00～19:30
- 場所：国連大学ビル 地球環境パートナーシッププラザ（GEOC） セミナースペース
- 概要：

東日本大震災の原発事故を経た今、現行の環境アセスメント制度の構造と専門家や市民を含むステークホルダーの関わり方が大きく問われている。今後、人間社会が目指すべき将来シナリオと、それに連動する環境アセスメントの構造と機能、および現状の課題について千葉県環境生活部副技監・千葉県立中央博物館副館長の中村氏に話題提供をいただいた。

今回の定例会では、環境アセスメント制度の基本理念から始まり、里山・里海と生物多様性、環境アセスメント制度の課題、人間社会のベクトルと将来シナリオの4つの議題について、中村氏のフィールドである千葉県を例にご紹介いただいた。

里山・里海とは、人間が創り出した環境であり、モザイク的な空間を有していること、土地固有の品種を耕作していること、また、節度ある自然利用により独自の文化が育まれている土地利用の概念的な呼び名である。高度経済成長期以前の日本では、ひとつの村単位でこの里山・里海の恵みを楽しみ、環境に無理のない循環型の土地利用を形成していた。その結果、複雑な環境が創出され、多様な生き物と共存する‘生物多様性豊かな環境’が形成されることとなった。また、‘多様である’ということは、天災などによる負の影響を受けても柔軟性を持って対応できる能力を備えていることを指す。

一方、人間社会では、都市の開発とともに効率を求めた人工的かつ単一な環境が広がりつつあり、その結果、人の「無縁化」が進んでいる。今後の、人間社会の将来シナリオとしては、自然・人工・ローカル・グローバルの視点からそれぞれの目標像が考えられるが、本来、人が望む幸福や子供たちの将来を追及すれば、「無縁社会」から「地縁社会」（土地に根差した助け合いと分かち合い）への転換が必要であり、そのためには人の「おもい」を環境アセスメントに反映すべきだとのご意見をいただいた。豊かな社会の形成には、健全な「人」・「文化」・「自然」が不可欠である。

講演後の意見交換では、実務レベルの話として、「環境アセスメントでは可能な限り環境への影響を定量評価して科学性を担保すること」、「地域の人々の「想い」を計画に反映させること」など、活発な議論が行われた。

今回の定例会では、「人の幸福」から将来的にどのような社会を形成していくべきかという、社会の根本的な課題に向けた議論が多かった。そして、「人の幸福」の土台となる土地の広がりについては、環境アセスメントの役割が大きいことを再認識することができた。将来の子供たちに「地縁社会」を残すため、行政・専門家・技術者そして地域住民が責任をもって話し合い、土地利用をプランニングしていく時代がきたといえる。

（レポーター：大日本コンサルタント株式会社 新井聖司）